

悪霊と夢

— エウアグリオス・ポンティコスの議論を中心として —

津田 謙治

1. 「問題設定」

禁欲や節制を通じて霊的な探究を試みる古代の隠修士たちにとって、日毎に現実的ないしは空想的な欲望を具現化して苦悩させる夢の視像は、魂の平安を掻き乱すものであり、確固たる不動心を獲得するための障害となっていたことは十分に推察される。しかし、彼らの修養の基盤の一つとなる聖書では、夢に関する両義的な価値観が見出され、基本的には神的な起源をもつ夢の積極的な位置付けが強調されているように見える。例えば、ハランに向かったイサクの子ヤコブが見た天地を繋ぐ階段を昇降する天使や（創世記 28：10-22）、ヨセフに現れて聖霊によるマリアの懐胎を説明する天使のように（マタイ 1：20-25）、聖書では神的な事柄と結び付く夢が記述されている。他方で、旧約聖書の中には夢幻を語る偽預言者への警戒など（エレミヤ 23：25-28、ゼカリヤ 10：2）、夢についての否定的な言説も見られ、夢で見た内容をそのまま無批判に受け入れるべきとは見做されていない。

東方の隠修士たちの活動が活発化する 4 世紀に先立って、アレクサンドリアのクレメンス（150 頃-215 頃）はヤコブが見た階段と天使の夢に積極的な価値を見出しつつも¹、我々が日常的に見る夢を情欲や幻影と結び付いたものと捉え、これを可能な限り斥ける禁欲的な立場を唱えていた²。このような議論が後の時代の修道士たちにも部分的に継承される一方、クレメンスに影響を受けつつ後代の修道士だけでなく東方キリスト教世界全般に強い影響を及ぼしたオリゲネス（185 頃-254 頃）は、基本的には夢を肯定的に捉え、夢を通じて異教徒たちが迫害者からキリストの信徒へと回心していることを報告している³。すなわち、聖書だけでなく、3 世紀頃の東方教父たちの議論においても、夢には両義的な価値観が見出されると言えるのである。

上述のような思想史的背景を概観した上で、本研究ではエウアグリオス・ポンティコス（345 頃-399）の夢概念を分析する。4 世紀に生きたエウアグリオスは、東方の修道制および霊性神学の確立において最も重要な人物の一人と見做されるが、彼の死後 6 世紀に開かれた第二コンスタンティノポリス公会議（553 年）ではオリゲネス主義者として断罪された。彼を含む古代東方世界の夢概念の思想史的分析は未だ十分に為されているとは言え

ず⁴、またエウアグリオスの夢概念が他の神学的な諸概念（例えばアポカタスタシスなど）と同様にオリゲネスの影響下にあるかについてなど、研究史的に分析すべき点が多い。本研究では、エウアグリオスに関する伝承と、彼の二つの著作（『修道士の書』『妄念論』）を分析の主軸として、その特徴を浮き彫りにすることを試みたい。

2. 「エウアグリオスの生涯と夢」

エウアグリオスの生涯については、彼の弟子とされ、彼と共にエジプトで8年近くを過ごしたパラディオス（364頃-420/430）が比較的詳細な記述を残している⁵。パラディオスはエウアグリオスを真に使徒的な生き方をした人物として描いているが、彼がオリゲネス主義者として断罪されたことにより、幾つかの写本ではエウアグリオスに関する記述が消去されている。記述が残された写本によれば、エウアグリオスはポントス地方のイボラという街で辺境司教の子として生まれたとされる（345年頃⁶）。カイサリアのバシレイオス（330頃-378）によって聖書朗読者に任じられたのち（371年以後）、ナジアンゾスのグレゴリオス（329/30-389/90）のもとで研鑽し、彼によって助祭に叙階された（379年）。グレゴリオスが第一コンスタンティノポリス公会議（381年）の途中で当地の司教職を失うと、エウアグリオスはグレゴリオスのもとを去って次のコンスタンティノポリス司教ネクタリオス（397年没）に付き、すべての異端を論駁したとされる。

彼の生涯と夢が関連するのは、彼がこのコンスタンティノポリスの地を去る時である。のちにエウアグリオスが回想してパラディオスたちに語った内容によれば（『ヒストリア・ラウシアカ』38,3-7）、彼は高い社会的地位にある既婚女性と相思相愛になり、その欲望に囚われたために神に祈っていると、次のような夢を見たと言われる。

「……彼〔エウアグリオス〕の祈りが実を結び、総督の兵士の姿をした天使の幻影が彼の前に現れた〔ἐπέστη αὐτῷ ἀγγελικὴ ὄπτασις〕。〔天使は〕彼を捕らえて法廷に連行し、首と手に鉄の枷と鎖を繋ぎ、いわゆる牢獄に投げ入れた。彼には連行された理由は告げられなかった。しかし、彼自身、その意識において、かの女性のことでこの出来事が生じたことは知っており、女性の夫が訴えたものと推測した。」（パラディオス『ヒストリア・ラウシアカ』38,4⁷）

彼は突然現れた兵士に捕縛され、牢獄に監禁されたが、それが天使によって行われたことや、その理由についてもある程度わかっていた。すると、今度はこの天使が彼の友人に姿を変え、このままエウアグリオスが街に留まり続けることは危険であると警告する。彼は甘んじてこの罰を受け入れるつもりであると主張するが、この言葉に対して天使は繰り返し街を去るように勧告し、結果的に彼はそれを受け入れたとされている。

「……かの者〔天使〕が彼〔エウアグリオス〕に言う。『私が福音書を持ってくるので、これに向かって、この街〔コンスタンティノポリス〕から退いて、自分の魂に配慮することを私に誓いなさい。そうすれば、このような苦悩からあなたを解放しましょう』。そこで、天使が福音書を持ってきて、エウアグリオスは福音書を通して彼に誓った。『先に自分の衣服を船に投げ入れるための一日を除いて、〔この街には〕留まりません』。さて、誓いが無事に終わると、彼はその夜自分に起こった恍惚状態から戻った〔ἐπανήλθεν ἀπὸ τῆς ἐκστάσεως τῆς γενομένης αὐτῷ ἐν τῇ νυκτί〕。そして彼は起き上がり〔ἀναστάς〕、「たとえ恍惚状態において〔ἐν ἐκστάσει〕誓いが為されたとしても、〔現実と〕同様に私は誓ったのだ」と考えたのである。自分の持ち物すべてを船に投げ入れると、彼はエルサレムに向かった」(パラディオス『ヒストリア・ラウシアカ』38,6-7)

目覚めたのち、エウアグリオスは天使とのやり取りが夢であったことに気づいたが、聖書に誓った事柄を現実の出来事と同等と見做し、誓いの通りにコンスタンティノポリスを去っている(383年)。彼はエルサレムに向かい、その地で修道女メラニア(342頃-410頃)との出逢いや自らの大病などを経て、彼自身も修道士となった。アレクサンドリア南東のケリアで他の修道士と交流をもったのち、399年頃に亡くなっている。

上述の高い社会的地位の既婚の女性に関する議論は、既に確認したように、パラディオスがエウアグリオスから直接聞いた話として(「その想念から解放されたのち、彼〔エウアグリオス〕が我々に詳述したように〔ὡς αὐτὸς ἡμῖν διηγήσατο, ὕστερον ἐλευθερωθεὶς τὸ φρονοῦν〕」38,3)伝えられており、夢の内容も恐らくここで彼が聞いた話に含まれるであろう。さらに、ここでは「夢」を意味する「エニユプニオン」や「オネイロス」という語が明確には出て来ないが、主体となる天使を幻影、そしてその幻影と一連の出来事を見ている状態を「その夜彼に起こった恍惚状態」(38,7)としていることから、夢を見ているこ

とと捉えて問題ないであろう⁸。このパラディオスの議論を引用しているソゾメノス（5世紀前半）も、この箇所を明確に「夢」と見做している⁹。

夢を見ている状態を「エクスタシス」を用いて表現する在り方は、エウアグリオス自身の言説に遡るものか、パラディオスが説明のために用いたのかは判然としない。しかし、この表現は使徒行伝などにおいて幻と関連付けて用いられていたにもかかわらず¹⁰、これから見ていくように、基本的にはエウアグリオスの著作中の夢に関連した議論には見出されず、また彼に先行するアレクサンドリアのクレメンスやオリゲネスの議論にも殆ど見られない。西方教父の議論に目を向けるならば、テルトゥリアヌスがエクスタシスと夢を結び付けて論じている箇所が見出される¹¹。ただし、不明瞭なあたりではあるものの、テルトゥリアヌスがこの語を魂の状態や眠りと関連付けて論じているのに対し、パラディオスの報告では魂との関わりは明確にはならない。

また、エウアグリオスが、夢の中で福音書に誓約した事柄が現実世界においても効力をもつべきであると捉えていることから、彼が夢を単なる空想や絵空事とは区別している点が窺える。これは、夢で神の臨在を体験したヤコブがその地をベテルと名付けたように（創世記 28：16-19）、聖書に記述された夢の位置付けに通ずるものであると言える。ここでのパラディオスの報告は、エウアグリオスが夢を啓示的なものとして肯定的に捉えたことの論拠になるが、彼自身の思考や表現とどれ程一致しているかは確言できない。したがって、以下ではエウアグリオス自身の著作と見做されるものから、夢概念に関わる議論を確認してみたい。

3. 「『修道士の書』における夢概念」

エウアグリオスの主要著作と言われる一連の文書群の中で、恐らく最初に位置付けられるのが『修道士の書』である。この書は修養に関わる事柄を 100 のケファライア（チャプター）にまとめており、修行に際して悪霊による妨害を克服し、修道士を完全な不動心へと導く内容を含んでいる。

本書の前半部（1-53¹²）では、（悪しき）八つの想念〔Ὀκτώ...οἱ...λογισμοὶ¹³〕（貪食〔ὁ τῆς γαστριμαργίας〕、淫蕩〔ὁ τῆς πορνείας〕、金銭欲〔ὁ τῆς φιλαργυρίας〕、悲嘆〔ὁ τῆς λύπης〕、怒り〔ὁ τῆς ὀργῆς〕、嫌気〔ὁ τῆς ἀκηδίας〕、虚栄心〔ὁ τῆς κενοδοξίας〕、傲慢〔ὁ τῆς ὑπερηφανίας〕）（6）と、悪魔とこれらの想念との関わりについて論じられているが、それらの中でも最も

多くのケファライアが割かれているのが怒りについてである。怒りの本来の在り方は悪魔や快楽との戦いに向けられるべきものであり、その戦いを天使たちが援助し、また勧告しているが、悪魔も同様に怒りを利用し、人間と戦うように仕向けているとされる(24)。そして、悪魔は気概を混乱させることによって〔ἐκ τῆς ταραχῆς τοῦ θυμοῦ〕、恐怖を引き起こす幻や夢を見させるため、気概に関わる憤怒〔τῷ παρογισμῷ〕を夜に持ち込まないようにすべきである(cf. エフェソ 4:26)と彼は論じている(21)。悪魔がどのように夢を利用するかについて、エウアグリオスは以下のように述べる。

「眠っている間の幻像において〔ἐν ταῖς καθ' ὕπνον φαντασίαις〕、悪霊たちが〔οἱ δαίμονες〕〔魂の〕欲望的部分に〔τῷ ἐπιθυμητικῷ μέρει〕攻撃を仕掛け、友人との偶然の出会いや親族との饗宴、そして女性たちの歌舞やその他このような快楽を引き起こすものを見せつけ、そして我々がそのようなものに走り寄るような場合、その〔欲望的〕部分において我々は病んでおり、情動が〔τὸ πάθος〕強まっているのである。他方、〔悪霊たちが〕気概的〔部分〕を〔τὸ θυμικόν〕ひどく混乱させ、陰しい道を進むことを強制し、武装した男たちや有毒獣や肉食獣を連れてきて、我々がそのような道を怖がり、また上述の獣や男たちによって追い詰められて逃げる場合、我々は気概的部分に〔τοῦ θυμικοῦ μέρους〕配慮し、眠ることなくキリストを呼び求めつつ、既に述べた治療法を用いよう。」(エウアグリオス『修道士の書』54)

悪魔は夢見の中で幻を用いて我々を攪乱させるが、そのとき我々の心の内部の働きに応じて様々な反応が引き起こされる。ここでは情動に関わるかたちで、我々の魂にいくつかの部分が見出されており、欲望的部分は快楽に向かって惹き付けられるようになり、また気概的部分は恐怖などで脅かされると考えられている。これらの考え方の基底には、プラトンにおける魂の三分説との類比が見出され、エウアグリオス自身、別の箇所ではプラトンの説く魂の理性的部分に相当する知性(νοῦς)の働きについても述べている(36)。しかし、プラトンにおいては基本的には理性的部分が他の二つの部分、即ち欲望的部分と気概的部分を統轄すると考えられるのに対して¹⁴、上述の引用箇所ではこれらが悪魔に掻き乱された時に用いる「治療法」は必ずしも知性や理性に訴えるものだけとは限らない。先の引用よりも前のケファライアでは、愛をもっとも大いなるものと見做すパウロの記述(一コリ 13:13)に恐らく基づいたかたちで、理性に頼るよりも愛に依拠することが説かれて

いる (38)。

エウアグリオスが悪魔による攪乱を乗り越えた先に希求しているものは、不動心 (ἀπάθεια) である。本書の後半部 (54-) は不動心の確立に向けて議論が展開されており、睡眠時の夢はこのような議論の最初の位置を占めている。ストア主義的な響きを有する不動心と夢の関係について、彼は次のように述べている。

「不動心のしるしを [Τὰ τῆς ἀπαθείας τεκμήρια]、昼間は想念を通じて [μεθ' ἡμέραν μὲν διὰ τῶν λογισμῶν]、夜間は夢を通じて [νύκτωρ δὲ διὰ τῶν ἐνυπνίων] 我々は認めるであろう。そして、不動心が魂の健全さのことであり、その糧は知識 [τὴν γνῶσιν] であると我々は言うであろう。そしてこの [知識] のみが、慣例的に、我々を聖なる諸力に [ταῖς ἁγίαις δυνάμεσιν] 結び付けるのである。というのも、非物体的なものの結合は [ἢ τῶν ἀσωμάτων συνάφεια]、類似した性質のものから生じることが自然だからである。」
(エウアグリオス『修道士の書』56)

ここでは、不動心に達したか否かを知る手掛かりとして、夜の夢が取り上げられている。この引用の直前では、夜間の遺精に際して夢の視像が伴わなければ、不動心である魂の健全さを指し示すが、視像が形成されれば魂の病の証と見做される (55)。また、後の箇所では、夢見における幻に対して平静さを保持することも、不動心をもつ証の一つと捉えられている (64)。

この『修道士の書』では、完全な不動心に到達しようとする修道士たちを妨害する悪魔の手段の一つに夢見の幻があるとされ、またそれは不動心への到達度を測る基準にもなっている。また、悪魔による攪乱のメカニズムとして、プラトンの魂の三分説が部分的に前提とされていることが見出される。

4. 「『妄念論』における夢概念」

既に見たように、エウアグリオスは没後 150 年ほど経って異端者と見做されたため、その著作は破棄されてきた。しかし実際には、その幾つかは別の思想家の著作として保持されていた。『妄念論』は、これまでアンキュラの苦行者ニロス (430 年頃没) の著作と考えられていたが、現在はエウアグリオスのものと捉えられている。執筆時期は判然としない

ものの、『修道士の書』における悪しき八つの想念に関わる議論を掘り下げ、夢についても詳細について論じている。ここでは、悪霊による攪乱を克服して不動心を目指す枠組みは『修道士の書』と同一であるが、一見すると、我々の魂についての捉え方については相違があるように見える。

「眠っている間の幻像において〔ἐν ταῖς καθ' ὕπνον φαντασίαις〕、悪霊たちが〔οἱ δαίμονες〕どのように我々の〔魂の〕主導的部分〔τὸ ἡγεμονικὸν〕に刻印し、形を残すのかについて探究されねばならない。というのも、このようなことが知性に〔τῷ νῷ〕生じるのは、見るという視覚によってか、聞くという聴覚によってか、ある種の感覚によってか、または記憶によってであると思われるからである。記憶は、〔直接〕身体を通して〔主導的部分に刻印するの〕ではなく、身体を通して得たものを動かすことによって〔魂の〕主導的部分に刻印する。さて、悪霊たちは、記憶を動かすことによって主導的部分に刻印しているように私には思われる。というのも、身体器官は眠りによって〔ὑπὸ τοῦ ὕπνου〕活動を抑制されるからである。それではさらに、どのように悪霊たちが記憶を動かすのかが探究されねばならない。恐らく情念によってであるだろうか。このことは、清らかな者たちや不動心の状態にある人々には決して起こらないことから、〔情念によってであることは〕明らかである。」（エウアグリオス『妄念論¹⁵』4）

引用文の冒頭は『修道士の書』（54）と全く同一であり、悪霊たちは夢見の幻を用いて我々を攪乱するとされている。しかし、『修道士の書』では悪霊たちが魂の欲望的部分や概的部分に働きかけると考えられていたのに対し、ここでは魂の主導的部分に視像を刻印すると捉えられている。また、その視像が主導的部分で形成されるのは、悪霊たちが直接何かを刻むのではなく¹⁶、覚醒中に獲得した記憶を情念によって動かすことによると見做されている。眠っている間、感覚器官は休止状態にあるからである。『修道士の書』では魂の二つの部分に直接的に視像が送り込まれるようなかたちで論じられていたのに対し、『妄念論』においては記憶や情念を媒介とするだけでなく、魂に視像を結ぶ働きにストア主義的な「主導的部分（ヘゲモニコン）」を据えていることも特徴的である¹⁷。他方で、上述の引用文で不動心に達した人々が、恐らく情念を動かされることがないために、睡眠中に悪魔が働きかけても幻を見ることはないと彼が論じている点は、『修道士の書』とも共通する（64）。ただし、不動心と愛を結び付け（81）、両者を修養生活の主軸に置こうとする『修

道士の書』における議論は、『妄念論』にはあまり見られない。

他方で、悪霊が見せる具体的な夢や幻に関する記述では、魂の主導的部分に関する議論は後退し、『修道士の書』に見られたように悪霊が魂の気概的部分や欲望的部分に働きかけるとする捉え方が展開されている。

「このように、隠修士たちは、昼間は悪霊たちによって試みられて様々な想念に遭遇し、夜間はさらに眠っている間に〔καθ' ὕπνον〕有翼の毒蛇と戦い、肉食獣に取り囲まれ、蛇に締め上げられ、高い山から突き落とされる。眠りから覚めても〔διωπνισθέντες〕再び同じ獣に取り囲まれ、僧坊が燃えて煙が出ているのを見る¹⁸。そして、このような幻像に身を任せず、臆病に陥らない場合、すぐに悪霊たちが女性たちに姿を変えて、見苦しく墮落し、恥知らずにも戯れようとするのを見る。これらすべてを悪霊たちは企て、隠修士たちに向かって戦いを挑むために、気概ないしは欲望を掻き乱そうと〔θυμὸν ἢ ἐπιθυμίαν συνταράξαι〕欲しているのである。なぜなら、夜間に事前に掻き乱された気概は〔θυμὸς νύκτωρ προταραχθείς〕翌日にはすぐに誘惑に陥り、眠っている間の幻像において事前に駆り立てられた欲望は〔ἐπιθυμία...ἐν ταῖς καθ' ὕπνον φαντασίαις προκίνηθεισα〕淫行の想念を容易に引き受けるからである。悪霊たちがこのような幻像を彼らに押しつけるのは、私が述べたように、翌日へと道を切り開くためか、あるいは前日に事前に掻き乱された者たちを夜間に可能な限り弱体化させようと欲するからである。」（エウアグリオス『妄念論』27）

ここでは、悪霊たちが記憶を動かして魂の主導的部分に刻印するとする議論は見られず、彼らは魂における気概や欲望を直接掻き乱そうとする。さらに、上述の『妄念論』の引用箇所では、『修道士の書』で見られた有毒獣や肉食獣との戦いが有毒の毒蛇や巻き付く蛇などに具体化され、眠りから覚めてからの悪しき幻についての叙述も見出される。悪霊たちは眠っている間に夢を利用して修道士たちの心を弱体化させることで、覚醒後の彼らをより容易に墮落させようとする戦略を採るとされており、このようなメカニズムは『修道士の書』にも類似した記述があるものの、より因果関係などが明確化されていることが見出される。

また『妄念論』の方には、『修道士の書』には見られない虚栄に関する具体的な夢の在り方が論じられている¹⁹。これは、悪霊たちが墮落の事前準備として夢の中で気概的部分や

欲望的部分に働きかけようとして失敗した場合に、別の戦略として用いられるものとされている。

「悪霊たちが気概や欲望を〔θυμὸν ἢ ἐπιθυμίαν〕夜間に掻き乱せなかった場合、虚栄による夢をでっち上げ〔τὸ... κενοδοχίας ἐνύπνια πλάττουσι〕、魂を情念の破滅へと引きずり下ろす〔εἰς βάραθρον λογισμῶν κατάγουσι τὴν ψυχὴν〕。このような夢は〔αὐτῶν τὰ ἐνύπνια〕、いわば次のような種類のものである。我々は、自分が悪霊を非難したり、身体のだこかの苦しみが癒されたり、羊飼いの衣服を身に纏って羊の群に身をかがめたりするのをしばしば見ることがある。そして目覚めるとすぐに司祭に叙階される幻像〔ιερωσύνης φαντασίαν〕を受け取り、そのような事柄を一日中考えるのである。または、癒しの賜物が自分に授けられて、しるしが起こるのを予見し、癒された者たちや兄弟たちからの尊敬、そしてエジプトや異国から名声によって駆り立てられた人々が自分のところにやって来て、贈り物が与えられるのを想像するのである。悪霊たちは修道士たちをしばしば慰められないほどの悲嘆に陥れ、彼らに親族が病気に罹っていたり、陸地や海で危険に晒されていたりするのを見せる。また、夢の中で〔δι' ἐνυπνίων〕兄弟たち自身に修道生活の難破を予言し、梯子の高みに登った者をそこから突き落とし、彼らの目を再び見えなくして壁を触れて歩くようにさせるのである。」（エウアグリオス『妄念論』28）

ここでは、悪霊たちが魂の特定の部分にそれに対応する夢、例えば気概的部分に対して恐怖、欲望的部分に淫行に関わる夢などを見させるのではなく、目的のはっきりしない抽象的な夢を見させる手法が論じられている。このような夢は、一見すると必ずしも否定的な内容ではないが、目覚めてから内容を吟味すると、自分の潜在的な能力を過信し、ある種の尊大さが魂の中に芽生え、賞賛や物質的な贈呈品など周囲に必要以上の事柄を期待し、結果的に情念に囚われてしまうとされている。また、近親者の危機などの具体的な夢を用いて徹底的に悲嘆させ、修道生活を頓挫させる手法についても論じられており²⁰、多様な夢の在り方が見出される。虚栄に関する夢では、魂の特定部分（欲望的部分や気概的部分、また主導的部分）に関する議論は見出されないが、魂の主導的部分に関わる夢見のメカニズムと必ずしも両立し得ないものではない。

5. 「天使の夢」

ところで、『妄念論』には悪霊からもたらされる夢だけでなく、天使によってもたらされる夢に関する記述もある。それは著作全体においても悪霊からの夢を論じる際の付加的な位置付けであり、記述自体も少ない。天使の夢については、上述の虚栄や悲嘆に関連した夢に続くかたちで、次のように述べられている。

「というのも、天使たちの夢は〔Τὰ γὰρ ἐνύπνια τῶν ἀγγέλων〕、そのような〔悪霊たちが魂を欺くような〕ものではなく、魂の大きな平安や言い表せないほどの喜びを与え、日常的に心を動かす情念を取り除き、清らかな祈りをもたらし、主を通じて次第に明確化された、被造物のある種の理と、主の知恵を明らかにするのである〔τὴν τοῦ κυρίου σοφίαν ἀποκαλύπτοντας〕。」（エウアグリオス『妄念論』28）

悪霊たちの夢と異なり、天使たちの夢は魂に安らぎと歓喜をもたらすものと捉えられており、情念からの解放と祈りに結び付けられている。後半部分の主キリストに関わる箇所は意味が通りにくく、写本の改竄等の可能性も指摘されている²¹。また、既に見た夢と魂の主導的部分に関する『妄念論』の記述（4）の後半部分にも、人間自身や聖なる力²²によって生じる記憶の活動について触れられており²³、聖徒たちとの交わりがそのような活動による幻像として取り上げられている。他方、既に見た『修道士の書』には、天使たちが我々に見せる夢に関する議論は見られないが、彼らは人間を観想で満たし（76）、また悪魔と同様に人間に想念を投げ入れるものの、それは悪魔が投げ込んだものと違い抗うことはできないが、しかしこの想念の後には混乱ではなく平安な状態〔εἰρηνική κατάσταση〕が訪れると論じられている（80）。

上述の天使たちによる夢に関連する議論は、ほぼすべての箇所で悪魔が見せるものとの対比の中で扱われている。したがって、悪魔たちの見せるものの特徴を浮き彫りにすることに寄与しているが、天使たちの夢を見ることが必ずしも修養における目標には掲げられていないことは確認すべき点であるだろう。また、既に見たように、パラディオスはエウアグリオスが見た天使の夢について記録を残しているが²⁴、基本的にその内容は警告であって、エウアグリオス自身によって『修道士の書』や『妄念論』で語られる天使の夢とは、扱う内容としても、また説明のために用いられる語法などの面からも異なっていると言え

る。

他方で、神自身ではなく天使たちによって夢を見んとする議論は、古代アレクサンドリアではユダヤ人フィロンが展開していたものの一つであった。フィロンは「創世記」に出て来る夢の記述に特化した議論を『夢』の中で扱っており、そこでは神自身から来る第一の夢、万物の精神や天使などがもたらす第二の夢と、魂自身が狂乱状態で見える第三の夢という三つの類型について論じている²⁵。フィロンが天使たちの夢として例示しているのは、「創世記」におけるヤコブがハランに向かう途中で見た階段の夢（28：10-22）などであるが、この第二の類型は夢の内容としての明瞭さが第一のものと第三のものの中にあるとされている²⁶。他方、同じアレクサンドリアでは、既に見たようにオリゲネスが聖なる霊による夢について論じており、異教徒がそのような霊によって夢を見て、キリスト教へと回心するとされている²⁷。フィロンもオリゲネスも、悪霊が見せる夢と対比させてはいないが、人間に対する神の働きかけの一つとして位置付けている点はエウアグリオスとも共通していると言えるであろう。

6. 「魂の構造」

夢見における悪霊の働きかけと、夢そのものを我々が見る過程の説明として、エウアグリオスは繰り返し魂の構造に関わる議論を展開していた。悪霊は魂の欲望的部分や気概的部分に働きかけて夢を見させ、快楽や恐怖などを引き起こすことにより、夢から目覚めた後の修道士たちをより容易に墮落させようと試みるとされる。『修道士の書』では、魂の欲望的部分や気概的部分には「部分（μέρος）」という語が添えられることもあり、魂全体における一部であることが明瞭となっている。他方『妄念論』では「部分」といった言葉を用いずに論じている箇所が散見され、魂の全体と部分に関する考え方が見えにくくなっている印象を受けるが、基本的な枠組みは大きく相違するわけではない。二つの著作のどちらが先に書かれたものかは分からないが、『修道士の書』の方が魂の三分説をより意識しているのは明確である。この著作の後半部では理知的魂の三分説が明瞭に展開されており、そこでは理性的部分・欲望的部分・気概的部分のそれぞれに生じる徳が論じられている。

「我々の学識ある教師によれば、理知的魂〔τῆς λογικῆς ψυχῆς〕は三部分〔Τριμεροῦς〕から成っており、理性的部分において〔ἐν τῷ λογιστικῷ μέρει〕徳が生じる場合、それ

は思慮〔φρόνησις〕、理解力〔σύνεσις〕、知恵〔σοφία〕と呼ばれる。欲望的部分において〔ἐν τῷ ἐπιθυμητικῷ〕〔徳が生じる場合〕、それは克己〔σωφροσύνη〕、愛〔ἀγάπη〕、自制〔ἐγκράτεια〕〔と呼ばれる〕。気概的部分において〔ἐν τῷ θυμικῷ〕〔徳が生じる場合〕、それは勇敢さ〔ἀνδρεία〕や忍耐〔ὕπομονή〕〔と呼ばれる〕。また魂全体において〔ἐν ὅλῃ...τῇ χυλῇ〕〔徳が生じる場合〕、それは正義〔δικαιοσύνη〕〔と呼ばれる〕。思慮の働きは、敵対勢力に対して戦いを指揮し、徳を防衛し、悪徳に対して戦列を組み、偏らないように状況に従って管理すること〔διοκεῖν〕である。また理解力の働きは、我々が目標のために遂行するすべてのものを調和的に統轄すること〔ἀρμοδίως οἰκονομεῖν〕である。知恵の働きは、物的なものと同体的なものの理を観想することである。克己の働きは、我々の内部で理性に反する想像を引き起こす諸事物を情動に囚われずに見つめることである。愛の働きは、たとえ悪霊たちが穢そうとしても、神のあらゆる似姿に対して²⁸、原型とほとんど同じように身を委ねることである。自製の働きは、口によるあらゆる快楽を喜んで振り払うことである。敵を恐れず、恐ろしいものに進んで打ち勝つことは、忍耐と勇敢さの働きである。正義の働きは、魂の諸部分の調和と一致を実現することである。」(エウアグリオス『修道士の書』89)

ここで見られる魂の三分説は、プラトンが『国家』で展開している議論²⁹を基底とした上で、徳と関連付けて展開されている。それはプラトンのものではあるが、これらの議論の多くは偽アリストテレスの『美德と悪徳』の議論と並行関係にある³⁰。ただし、後半部を中心にキリスト教的な議論に接続している点は特徴的であり、また異教の考え方に基づくことを考慮してか、これは「我々の学識ある教師³¹」の議論であるとされている。

他方、夢見の過程を明らかにする議論の中では、魂の主導的部分の役割が主軸の一つに置かれていた。覚醒中に我々が得た記憶が動かされ、魂の主導的部分に刻印され、眠りの間に幻像となって現れるとする『妄念論』における主張は、『修道士の書』には見られない。ここでの魂に主導的部分があるとする考え方は、主にストア主義などに見られるが³²、アレクサンドリアの教父たちも夢との関連で用いていたことは指摘されうる。クレメンスは、神を愛することを学んだ者の魂の主導的部分は、日中の活動から得たものや表象などを受け入れずに不変であり続けると論じており³³、裏を返せばその境地に達していない多くの者たちは情欲に囚われ、魂の主導的部分にそのような表象を受け入れることに同意しがちであると考えられる。クレメンスは、不動心に達して覚知者となることを様々な

かたちで論じており、既に見てきたようにエウアグリオスの議論と重なる部分も多い³⁴。また、オリゲネスも、ある霊〔聖霊〕が人間に夢をもたらし際に、魂の主導的部分に働きかけると理解しており³⁵、エウアグリオスと並行する議論が見出される。ただし、エウアグリオスの場合、魂の主導的部分に働きかけるものとして取り上げられているのは、主に悪霊である点は注意すべきである。しかし、ここで重要な事柄の一つは、オリゲネスにおける聖霊にせよ、エウアグリオスにおける悪霊にせよ、主導的部分に幻像や表象が刻印され、我々がそれを見るとすれば、我々の魂がそれに同意している、という点であるだろう³⁶。クレメンスの議論にも接続するが、非合理的なものや覚知者に相応しくない表象を斥ける魂の境地を説く際に、エウアグリオスは不動心と神への愛の必要性を強調しているのである。

7. 「エウアグリオスの夢概念の位置付け」

ここまで我々は、エウアグリオスの夢概念を二つの著作を主軸に分析を行いつつ、クレメンスやオリゲネスなど東方キリスト教世界における思想史的な文脈での位置付けを考察した。

エウアグリオスの議論において、彼以前のアレクサンドリアの教父たちにも当て嵌まるが、夢と聖書的な解釈や文脈との関係が稀薄である点是指摘されるであろう³⁷。彼が夢を論じる際に、聖書の議論を手掛かりとすることは殆どなく、ヤコブやその子ヨセフの物語などに見られたある種の預言的・未来的な夢や³⁸、マリアの許婚のヨセフが見たとされる天使の夢も、特に彼の議論の中で関連付けられていた形跡は見られないであろう。他方、パラディオスが報告するエウアグリオスが見た夢は、聖書的な文脈に比較的近いものの、エウアグリオス自身の著作から見られる夢概念とはやや異なっている。前者において、夢は自身の生涯の転換点ともなる肯定的な位置付けであるが、後者においては基本的には否定的な文脈で夢概念が扱われている。

また、魂の主導的部分に刻印されることで夢の視像が生み出されるとする夢見の過程は、エウアグリオスに先行するアレクサンドリアの教父たちに並行箇所が見られる一方で、魂の三分説に従って欲望的部分と気概的部分に悪霊が働きかけることによって特定の夢が生み出されるとする議論は、エウアグリオスに特徴的なものであると考えられる。さらに、アレクサンドリアの教父たちの議論と比較して最も特徴的と言えるのは、悪霊が夢を見させるというエウアグリオスの夢概念の枠組みそのものである。彼は、不動心や神への愛、

また場合によっては知識（γνῶσις）を修養の先に希求したが、同様の考え方はクレメンスなどにも見られるものの、クレメンスが自らの魂の怠惰その他を目的達成の障害と見做そうとしたのに対して、エウアグリオスは様々な悪霊たちの働きを想定し、彼らとどのように戦うべきかが議論の主眼となっていた。夢と悪霊との関わりについては、既にテルトゥリアヌスが夢の分類の中で短く触れているが³⁹、これを霊的修養の側面から掘り下げ、中世以降の議論に展開される夢概念の礎を築いた思想家の一人として、エウアグリオスを挙げることができるであろう。

付記

本研究は、科研費（基盤研究(C)研究課題／領域番号 22K00099）の助成を受けたものである。

¹ アレクサンドリアのクレメンス『教師』2,78,3.

² アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』4,139,2-4.

³ オリゲネス『ケルソス反駁』1,46.

⁴ エウアグリオスの夢概念に特化した先行研究として、未だ彼の著作の校訂版が十分に揃っていなかった時代に公刊された F. Refoulé の研究（F. Refoulé, “Rêves et vie spirituelle: d’après Évagre le Pontique”, *Supplément de la vie spirituelle*, n.59, 1961 pp.470-516.）や、彼の研究や近年の校訂版の成果を踏まえて総合的な議論を展開した R. Rivas の研究（Rubén Peretó Rivas, “Dreams in Evagrius Ponticus’ Life and Teaching”, *Vox Patrum*, 67, 2017, pp.523-542.）がある。後者はエウアグリオスの夢概念を主に同時代の教父たちの議論の中で位置付けようとする点が特徴的である。

⁵ パラディオス『ヒストリア・ラウシアカ（ラウソスに宛てた修道士の歴史）』38,1-13.

⁶ Joel Kalvesmaki, “Evagrius of Pontus”, *Brill Encyclopedia of Early Christianity: Authors, Texts, and Ideas*, Volume III: Div – Isi, David G. Hunter(eds.), Brill: Leiden, 2024, p.258. 本研究におけるエウアグリオスの生涯に関わる主要な年代や出来事等については J. Kalvesmaki に基づく。

⁷ Palladius, *Historia Lausiaca: Geschichten aus dem frühen Mönchtum*, übersetzt und kommentiert von Adelheid Hübner, Fontes Christiani, Bd.67, Herder: Freiburg im Breisgau, 2016. cf. Palladius, *The Lausiak History*, translated and annotated by Robert T. Meyer, Ancient Christian Writers No. 34, Newman Press: New York, 1964.

⁸ A. Hübner は、独訳に際して「(夢の中で) [(im Traum)]」を補っている。A. Hübner (2016), S.245.

⁹ 「神は彼に救済的な夢の視像を送った [αὐτῷ... σωτήριον ὀνείρατος ὅψιν ἐπιπέμπει τὸ θεῖον]」(6,30,9.)、「神の夢によって説得されて [τῷ θεῷ ὀνείρῳ πεισθεῖς]」(6,30,11)。
Sozomenos, *Historia Ecclesiastica / Kirchengeschichte III*, übersetzt und eingeleitet von Günther Christian Hansen, Fontes Christiani, Bd. 73/3, Brepols: Turnhout, 2004.

¹⁰ 使徒行伝 10 : 10、11 : 5 など。ただし、幻をエクスタシスの状態で見たとペトロは、必ずしも眠っている状態ではない。cf. Bronwen Neil, “The Development of an Alexandrian Tradition”, in: *Dreams, Virtue and Divine Knowledge in Early Christian Egypt*, Bronwen Neil, Doru Costache and Kevin Wagner, Cambridge University Press:

Cambridge, 2019, pp.27-28.

¹¹ テルトゥリアヌス『魂』47,3-4. cf.拙論「テルトゥリアヌスにおける夢概念の分析 – 『魂』の議論を中心として」『キリスト教学研究室紀要』第10号、2022年、10-17頁。

¹² A. Guillaumont らは、本書を53章までと54章以降を前半部と後半部に分けた上で、さらに前半部から1-5を導入部、また後半部から91-100を格言集として区別し、4部分に区分している。Évagre le Pontique, *Traité Pratique ou Le Moine Tome I*, Introduction par Antoine Guillaumont et Claire Guillaumont, Sources Chrétiennes, N.170, Les Éditions du Cerf: Paris, 1971, pp.117-119.

¹³ Évagre le Pontique, *Traité Pratique ou Le Moine Tome II*, Traduction, Commentaire et Tables par Antoine Guillaumont et Claire Guillaumont, Sources Chrétiennes, N.171, Les Éditions du Cerf: Paris, 1971. cf. Evagrius of Pontus, *The Gnostic Trilogy*, translated and annotated by Robin Darling Young, etc., Oxford University Press: New York, 2024, エウアグリオス・ポンティコス「修行論」『中世思想原典集成3 後期ギリシア教父・ビザンティン思想』佐藤研訳、上智大学中世思想研究所編、平凡社、1994年、29-81頁。基本的に本研究の引用箇所では私訳を試みたが、訳語の多くについて佐藤訳やその他の現代語訳を参照した。

¹⁴ cf. プラトン『国家』439D4-.

¹⁵ Évagre le Pontique, *Sur les pensées*, Introduction, Traduction, Notes et Index par Paul Géhin, Antoine Guillaumont et Claire Guillaumont, Sources Chrétiennes, N.438, Les Éditions du Cerf: Paris, 2020. この『妄念論』4に関しては、18世紀に編纂された『フィロカリア』に並行箇所がある。Filokalia tw n ierwn nhptikwn suneranisqeisa para tw n agiwwn kai qeoforwn paterwn, Tomos 1, (Athen, 1893), 26-29; *The Philokalia Volume I*, The Complete Text compiled by St. Nikodimos of the Holy Mountain and St. Makarios of Corinth, translated from the Greek and edited by G.E.H. Palmer, Philip Sherrard, Kallistos Ware, Faber and Faber: London, [1979], 1983, pp.38-52; 修道士エヴァグリオス「諸情念と想念との識別についての提要」『フィロカリア I』桑原直己訳、宮本久雄翻訳責任、新世社、2007年、136-137頁。

¹⁶ cf. F. Refoulé (1961), p.503.

¹⁷ アエティオス『学説史』IV,4,4 (『ストア派断片集』II,827) .

¹⁸ 既に覚醒している状態であるが、ここで見られる幻像が夢に起源があることが示唆されている。cf. R. Rivas (2017), p.531.

¹⁹ 『修道士の書』には虚栄心の想念に関する議論があるが(13)、以下に見る虚栄心の夢に関するものとは基本的な枠組みに少し類似点があるものの、説明の仕方は異なっている。cf. 『修道士の書』31-32, 58.

²⁰ 悲嘆についても『修道士の書』で論じられているが(19)、ここでの夢の議論とは相違する。

²¹ P. Géhin etc. (2020), p.255.

²² G. Palmer らは、聖なる力を「天使的力 [the angelic powers]」と訳している。G. Palmer etc. (1979), p.40. また、桑原もこの聖なる力に「[天使の]」を補っている。桑原 (2007)、137頁。

²³ 記憶や情念が、悪魔によるもの、人間によるもの、天使によるものとして三つに類型化されるとする議論が『妄念論』(8)にあり、P. Géhin らはこれを夢と関連付けている。P. Géhin etc. (2020), p.165.

²⁴ パラディオス『ヒストリア・ラウシアカ』38,3-7.

²⁵ アレクサンドリアのフィロン『夢』2,1-2.

²⁶ cf. 拙論「アレクサンドリアのフィロンの夢類型 – ストア主義および神秘主義的文脈における再検討」『キリスト教学研究室紀要』第11号、2023年、4-5頁。

²⁷ オリゲネス『ケルソス反駁』1,46.

²⁸ 『妄念論』では、知性 (ὁ νοῦς) が神の似像と見做されている。cf. Julia S. Konstantinovskiy, *Evagrius Ponticus: The Making of a Gnostic*, Ashgate New Critical Thinking in Religion, Theology and Biblical Studies Series, Routledge: New York, [2009], 2016, p.32.

²⁹ プラトン『国家』439D4-.

³⁰ 偽アリストテレス『美德と悪徳』1249B26-. cf. R. Young etc. (2024), pp.89-91.

³¹ エウアグリオスがここでプラトンの代わりに「我々の知恵ある師」と呼んでいるのは、バシレイオスやニュッサのグレゴリオスよりも、ナジアンゾスのグレゴリオスであると考えられている。cf. A. & C. Guillaumont (1971), pp.683-684. K. Corrigan はナジアンゾスのグレゴリオスに加えて、マカリオスの可能性も指摘している。Kevin Corrigan, *Evagrius and Gregory: Mind, Soul and Body in the 4th Century*, Routledge: New York, [2009], 2019, pp.43-45.

³² アエティオス『学説史』IV,4,4 (『ストア派断片集』II,827) .

³³ アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』4,139,2-4.

³⁴ エウアグリオス『妄念論』4. 他方で、この考え方に矛盾する箇所として R. Rivas は『覚知の諸問題』(4,60)を取り上げ、覚知に達した者でさえも、悪魔が生み出す夢の厳格に怯える可能性について指摘している (R. Rivas (2017), pp.534-535.). しかし、該当箇所のケファライアは記述が短く、確かに悪魔による夢に恐怖することは述べられているが、覚知者に当て嵌まるのか明確とはいえないように見える。

³⁵ オリゲネス『ケルスス反駁』1,46, 48.

³⁶ I. Graiver は、『修道士の書』(6)の記述を根拠に、情動の発動に関して我々の主体性を指摘しており、それをエウアグリオスを含む砂漠の修道士たちがオリゲネスから受け継いだものと捉えている。Inbar Graiver, “The Dangers of Purity: Monastic Reactions to Erotic Dreams”, in: *Dreams, Memory and Imagination in Byzantium*, Edited by Bronwen Neil and Eva Anagnostou-Laoutides, Byzantina Australiensia Vol, 24, Brill: Leiden, 2018, pp.22-23.

³⁷ ただし、既に見たオリゲネスにおける夢の議論は、ヨエル書(3:1)と関連付けられる可能性がある。

³⁸ R. Rivas が指摘するように、エウアグリオスは夢における未来的要素には無関心である。R. Rivas (2017), p.529.

³⁹ テルトゥリアヌス『魂』47,1. テルトゥリアヌスは、夢の大半のものが悪霊によって吹き込まれたものと捉えているが、それが具体的にどのような過程や内容を含むものなのかは判然としない。

(つだ・けんじ 京都大学大学院文学研究科・教授)